
明日は晴れますように。

叶音*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日は晴れますように。

【Nコード】

N0670Y

【作者名】

叶音*

【あらすじ】

11月の雨が降る。

渡部 沙織は黒い傘を両手に。

大塚 馨は黄色い傘を片手に。

お互いを意識するまでもない仲の良さが、2人の恋愛観を少しずつ変えていく。

黒色が自分色だった沙織は、馨と共に新たな色を探し始める。

黄色も良いのかもしれない。

そう思いはじめるのはいつ頃か…？

11月の雨傘

「雨、だな。」

師走が近づいてくる季節。

紅葉は散り、雪も降らない。

11月は、季節を感じる要素が限りなく少ないと私は思っている。

あくまで勝手な意見だが。

そんな季節に降る雨は、いつになく哀しさを増しているような気がしてならない。

「そうだ…ねえ。」

会話が途切れつつあるのは、お互いが会話にやる気を持っていないからという訳ではない。

雨音が激しすぎるのだ。

「どうせ降るなら、もっと静かに情緒深く降ってほしいよな。」

「こんな雨、情緒もへったくれも無いよ。」

「まったく、渡部はいつもキツイよな。」

「クール&ドライと言ってもらいたいね。大塚こそ、情緒とか言っちゃってさ。」

色気のない会話を交えながら、私はお気に入りの傘を開いた。ボスンっという音を立てて開いた傘は、黒い蝙蝠のようだ。

私は黒色が好きだ。

理由は特に無いけれど、とりあえず何かと黒色を選んでいる。

ふと、隣にいる大塚の傘を見てみる。

「傘、黄色っ！」

「うわあ、ビックリした…何をそんなに驚いてんだよ。」

「だってさ、こんなに黄色いんだよ？まるで蛍光ペンだよ！」

「蛍光ペンって…大袈裟すぎんだろ。俺は黄色が好きなんだよ。」

そう言って大塚が開いた傘は、私には眩しすぎる色をしていた。黄色。

私が1番嫌いな色だった。

ちよつとした変化

「その傘、閉じてよ。」

見慣れた帰り道も、灰色の空のせいでくすんで見えた。

私の黒い傘は、その空間にすっかり溶け込んでいる。

大塚の傘は別だ。

今にも光りだしそうな傘。

真つ黄色というのは、この傘の様な色を言うのだろうか。

「何で傘を閉じなきゃいけないんだよ。」

「眩しいから。」

「…そんな理由か。」

ふう、と溜息をついた君は苦笑いをしながら傘を閉じた。

と同時に、スツと私の左側に入ってくる。

「入るな。」

「知らんな。渡部が傘閉じろって言ったんだろ？」

「そりゃあ…まあ、そうだけど。」

「じゃあ良いよな。」

「そのかわり、傘は大塚が持つてよね。」

理不尽…という訳では無いのだが、いまいち納得がいかない。

渋々私は右側に寄り、傘を大塚に手渡す。

ハタから見れば仲の良いカップルに見えるだろう。

冗談じゃない。

でも、嫌だとは思わなかった。

噂の彼

「ただいま。」

「あら、沙織帰ってきたの？おかえり。」

「うん、帰ってきたの。」

靴を乱暴に脱ぎ、廊下にカバンを投げ捨て… ようとした。
が、怒られるのは目に見えているから、靴は揃えて脱いだ。

「そうそう、今日の7時頃から智明君達が来るから。」

「あ、うん。分かった。」

智明君とは、私と同年齢の従兄弟の事だ。

顔は良いのに、性格はボロツクソだ。

「7時… ねえ、今何時なの？」

「6時48分よ。」

「ああ… つてええ！？」

「智明君達は来るのが早いから、そろそろ来るんじゃないかしら？」

「ううわあああ！」

私は智明が苦手だ。

というよりも、智明の性格が苦手だ。

何でもズバズバ言い、ガスガス喋り、痛いところをキリキリと突いてくる。

「早く着替えないと…！」

私はダンダンダンと階段を駆け上がり、自分の部屋に閉じこもった。
制服を急いで脱ぎ、そこら辺にあったジャージを着た。

自分から制服にシワを付けたいとは思わないから、制服はハンガーにかけた。

着替えが終わり、私はほっとしながら部屋を出ようとした。

「ふう… セーフだっ」

「アウト。」

身体中の血が逆流したような気がした。

そろ…つと顔を上げてみると、そこには噂の張本人がいた。
智明だった。

「とととつ…とも…ともあ智明…」

「ああ、智明だ。」

「ちっ近寄るな…てえい、十字架！」

「俺は吸血鬼か！」

私が入差し指で作った十字架を、智明がペシッと叩いた。

「痛っ…うう、悪霊退散！」

「俺は地縛霊か！」

あるいみ地縛霊…とは言えなかった。
智明。

トラブルメーカーである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0670y/>

明日は晴れますように。

2011年11月4日08時18分発行